

成虫のまま冬を越す虫たち



オツネトンボ 撮影:進基さん(北見市在住)

2015(平成27)年度の冬は数年に一度の暴風雪が数回あったものの、流氷期間(流氷初日から終日までの日数)は少なく、年平均気温も2014年に比べ僅かながら高く、暖冬傾向だったと発表されています。近年の冬は温暖ですが、氷点下20℃を越す日もある中、昆虫たちはどのように冬を越していたのでしょうか。

一口に昆虫の越冬と言っても、色々な越冬の方法があり、卵や幼虫、蛹や成虫とそれぞれの形態で越すのです。これを越冬態と言います。たとえばシジミチョウの仲間のゼフィルス類では、夏～秋頃ミズナラなどの冬芽に産卵し卵で越冬します。セセリチョウの仲間の多くは枯れ葉や枯れ草の下に潜り幼虫で越冬します。モンシロチョウは家の壁にへばりつくように蛹で、また、春一番に家の周りなどで目にする翅に目玉模様が特徴のクジャクチョウは成虫で越冬します。このように同じチョウでも様々です。

今回、注目して欲しい昆虫はトンボです。一般的にトンボは幼虫(ヤゴ)の時は水の中で生活し、成虫になると地上で生活します。このため、安全な幼虫での越冬態が一般的なのですが、中には成虫で越冬するものがあります。その名もまさしくオツネトンボ(越冬蜻蛉)と言います。

オツネトンボ(学名: *Sympecma paedisca*

(Brauer, 1877))はアオイトトンボ科、オツネトンボ属、いわゆるイトトンボの一種で、体色は淡い褐色で、どちらかと言えば地味な感じです。生活史は春に産卵し、夏から秋にかけて成虫となるのですが、未熟のまま越冬します。越冬する場所として、樹皮の間や建物の隙間を利用するようです。そして、翌年の春に成熟し、水草などの茎に産卵するというのを繰り返します。なお、成熟した個体は複眼が青くなるのが特徴です。

同じように国内には成虫で越冬する寒さに強い種類が他に2種います。ホソミオツネトンボとホソミイトトンボです。これらすべてイトトンボの仲間ですが、他のイトトンボの仲間はなぜ成虫で越冬しないのでしょうか。これは、各トンボの進化の過程の中で、培ってきた方法ですので、今後、地球規模の大きな環境変動により変化するものも現れると思います。

さあ、興味を持たれた方は春の沼や池を散策して青い眼をしたイトトンボ「オツネトンボ」を探しましょう。(松田功)

発行 知床博物館協力会 2016.5.24
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257
<http://shiretoko-ms.sakura.ne.jp/>